ワールドトリップ！！

志那都比古神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ワールドトリップ！！

【Ｎコード】
Ｎ９８６０Ｑ

【作者名】
志那都比古神

【あらすじ】
男は剣士として名を馳せていた。
女は魔法が使えた。
ある日、女は異世界へ行こうと考える。魔法のある、地球とは違う星へ。いつまでもを隠すのはいささか窮屈だったのだ。
女は男へもちかける。
「異世界へ行きませんか？」

剣士と魔術師の異世界漫遊記、開幕！！！

プロローグ（前書き）

主人公最強！！とまではいきませんがかなり強いです。苦手な人は素通りしてください。

プロローグ

俺は剣術を習っていました。

幼馴染は魔法が使えました。

俺たちはそれでも、幼馴染として一緒に遊んだりして少年時代をすごしました。

何年か経ち、大学受験も間近に控えたある日、幼馴染は言いました。

「異世界へ行きませんか？」

俺は考え、その返事に肯定しました。

俺は旅が好きだったのです。

無論異世界というのは生まれて初めてです。

異世界があることすら知りませんでした。

それでも俺は異世界を見てみたいです。新しい場所で、新しいドラマが巻き起こるかもしれません。

拝啓、皆様へ。

少々長旅になるでしょうが俺は相棒（かのじょ）と行ってきます、異世界へ。

第1話：異世界に行きませんか？

「異世界へ行かないか？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・

と彼女は言った。
「・・・なんだ？藪から棒に。」
「だから、異世界へ行こうではないか！」
「はぁ？」
「だから、異世界へ行こうではないか！」
なおも彼女は繰り返す。
「異世界ってあの？ラノベとかで出てくる？」
「うん！」
「ってことは世界渡りみたいな魔法を使うのか？」
「うん。」
「・・・確かすげえ魔法じゃなかったっけ？」
「SSランクだ。」
「そうですか・・・。」
やっぱり規定外だよ、この人。

さて、諸君らにはさっきから気になるワード（„魔法”）が出てきているはずだ。無論ここは日本の某県のとある高校の三年の教室。ちなみに放課後。俺が窓際の机でぼおっとしていると綾奈がやってきたという状況。ともかく科学の発達した島国、日本には変わりはない。
・・・蔑む目線嫌いだから先にいっときます。
「俺たちは電波じゃねぇ！！」

「ん？どうしたのだ？」
「あ、いや。なんでもない。」
こほん。では何故魔法などと言っているかというと彼女は本当に使えるのだ。その・・・魔法が。実家の倉庫をあさってたら出てきた魔導書を見て覚えたというのが本人談。

そりゃ最初は俺だって信用してなかったさ。だけどさ・・・いきなり森に連れ出されて・・・あいつがなんか呟いたかと思うとドラゴン出てきちゃったのよ。うん、リアルに魔方陣？から。十メートルはあるんじゃないかっている奴で眼は紅く鋭く牙も鋭くて口から唾液垂らしてた。・・・餓えてるね。

で、その時のあいつのドヤ顔は今でも忘れない。結局ドラゴンはすぐ消してくれたけど間近でそんなの見たんだから魔法も信じるしかなかった。まあ、それももう八年前のことだ。
それからも綾奈はたびたび魔法を見せてくれた。炎出したり、暴風巻き起こしたり。勿論見せてくれるときは森の中で結界？を張ってやっていた。そりゃそうだ、こんなもん世間様に出したら大騒ぎになって研究所に連れて行かれていろいろ弄繰り回されるに決まっている。

それで今回はなんと異世界に行くという。
「どういう風の吹き回しで？」
「いや、いつまでも隠れてコソコソ魔法使うのは窮屈だと思ったのだ。」
「まあ確かに。てか何で俺まで？」
「っそ、それは・・・」
なんかどもった。顔も赤い。大丈夫か？綾奈はしばらく顔を伏せた後ボソッと呟いた。
「疾風を・・とられたくなかったのだ・・そ、それに！！疾風も旅

をしたいと言っていたろう！！」
前半はあまり聞き取れなかった。それでも、
「まあ、旅はしたいけどね。」
そうなのだ。俺は旅が好きだ。見知らぬ街、土地、自然を求め気の向くまま風の向くままどこかへ行ってみたいというのは俺のひそかな夢だ。でもだからといって最初の目的地は異世界です！！って。どこぞのラノベじゃあるまいし。
「でもＳＳランクだろ？その魔法。・・・出来るのか？」
どうやら魔法にも階級があるらしい。Ｅランクの誰でも出来るような初歩的な魔法からＳＳランクの小国を一つ落とせるんじゃないかレベルまで。
「うん、出来るぞ。十分の一くらい魔力を使うが。」
・・・どうやら彼女は化け物のようだ。ちなみに魔力とは魔法を使うときに媒体とするエネルギーらしい。前森でＳＳランクの魔法を見せてくれたがアレはやばかった。うん、マジで。終わった後結界消し飛んだもん。んで勿論魔法を発動すると魔力を消費するらしい。ＳＳランクの魔法を放つには膨大な魔力が必要だ。なんたって最高ランク。威力も伊達じゃないが。それを三発も打てるという。

「お前、ホントに人間か？」
「失礼なッ！！」

ともかく。別に高校を出たら旅をしようと割と本気で考えていた身だ。異世界というのもなかなか新鮮で面白そうだし。
「いい「ほんとか！！？？」
セリフかぶせんなよ、おい。
「ああ。まあ、俺はお前がいればそれでいいしな。」と笑顔で言ってやった。こいつがいれば何かと退屈はしないし。旅の相棒としてはちょうどいい。
「っっ！！！」

「いざとなったら綾奈が魔法を使ってくれればどんな窮地でも大丈夫だろう・・・ってあれ？」
なにやら綾奈の様子がおかしい。茹蛸みたいに赤面して顔を伏せて何か呟いている。何々？「ううっ・・あの顔と言葉は反側だ・・・」
・・・ふむ。よく分からんが脳がオーバーヒートしているようだ。この様子だと暫く戻らないかな。俺は自然回復という選択をして、綾奈がかえってくるまで教室の窓の外の夕焼け空を眺めた。

綾奈（わたし）は悶々としていた。理由はさっきの疾風。あの顔で、あの笑顔で、あの言葉。
そもそも疾風は顔立ちがいい。黒目黒髪できりっとした目つき、すらっととおった鼻。思いを寄せる私が疾風の顔について挙げるときりがないのだが、それでも彼は世間一般で言うイケメンと呼ばれる部類に入るだろう。
・・・勿論笑顔もかっこいい。疾風耐性が出来ているはずの私でもさっきの笑顔にはぐらっときた。多分普通の女性が見たら一発で落ちてしまう。・・・実は異世界に行こうと誘ったのも、疾風を他の女性から遠ざけたかったためっ・・・というのも何割か占めている。まあ、顔、笑顔とここまでならいつも何とか耐えられるのだが問題はあの言葉。

”俺はお前がいればそれでいいしな。”

・・・他意はないのは分かってる。疾風は私の魔法があれば何があっても切り抜けれるといった意味を込めていっているのだろう。未だに私の思いに気づかないどころか呆れるほど鈍感だし。そのくせ女性を落とすようなセリフをさらっと言う。私の学校の女生徒間で有名な”女殺し”とはよくいったものだ。
それでも、他意はなくても、嬉しいものは嬉しい。疾風はある意味

私を必要としているのだ。想い人から必要とされている。その事実に思わず顔がにやけそうになる。思えばはじめてあった時から私の思いは変わらない。つまり私は疾風に・・その・・・あの・・一目惚れだったのだ。

出会いは十二年前だった気がする。小学校に上がりたての頃、私は疾風のいるこの町へ何度目かとなる転校をしてきた。理由は親の転勤という、いかにも転校生らしい理由。しかしどうやら親ももう転勤することなく腰を落ち着かせられるということで、私たちは一軒家を建ててもらい、住まいとした。

ある日の朝、私とお母さんはご近所に挨拶をしにいくことになった。お父さんは仕事の都合で来れなかった。新参者であるから当然のことだろう。地域付き合いというのは大切だ。

そして、一軒目のひときわ大きい建物の前で、疾風(かれ)と出会った。何処かへ行く途中だったのだろうか、今にも駆け出そうとしている状態で止まってこちらを見ている。年は私と同じくらいに見えたが、雰囲気は何か大人っぽかった。暫くすると彼は近づいてきて申し訳なさそうに尋ねた。

「あの、僕の家に何か御用でしょうか？」

その言葉は年甲斐もなくとても礼儀正しいものであったから、私たちはしばし唖然とした。

「ッええ。この家の子どもさんかしら？私たち、向かいの家に引っ越してきたの。挨拶をと思って。」

いち早く復活したお母さんが渡すはずの和菓子を見せながら言った。少年は暫し瞬きした後、

「そうでしたか。はい、僕は確かにこの家の息子で御剣疾風といいます。今年で小学校一年生になります。」といってぺこりとお辞儀をして、笑った。

同学年ということに驚いたが、それからというもの私たちは幼馴染として付き合ってきた。そしていつからか、私は疾風に恋心を持っていた。なんたって異性の幼馴染なのだ。当然のことだろう。
それなのに疾風(かれ)は・・・
恨むように疾風を見る。彼はいすに座ったまま窓の外を眺めていた。どうやら妄想に時間をかけてしまったらしい。話し始めたのが四時くらいだったから・・・三十分くらい妄想にふけってたのか。その間疾風は大方、私の反応がなくなったから困って景色を見ることで時間を潰していたのだろう。夕日に映える疾風の顔、ああかっこいい。
「って、そうじゃなくて！！」
「ん？おお、気がついたか綾奈。」
「あ、え、うむ。」
「そろそろ帰ろうぜ。夜も遅くなってきたし。異世界の話はまた今度な？」
そういって疾風は立ち上がった。そういえば疾風はいつも和服だ。私の高校(うち)は私服自由だからいいのだが彼はいつも薄い黒の浴衣のような着流しを着ている。昔その理由を尋ねたところ、
「家は代々続く由緒正しい家柄だからな。兄貴が家を継いでるとはいえ、和を重んじてるしな。」とのことだった。

「お～い。置いてくぞ？」
はっと見ると疾風はもう教室の扉に手をかけていた。・・・私の妄想癖も何とかしなければ。
「待ってくれ！今行く！！」
私は急いで彼の後を追った。
まだ見ぬ異世界への不安と期待に胸を躍らせながら。
そして旅の中で疾風との距離が縮むことを信じながら。

第1話：異世界に行きませんか？（後書き）

「ちなみにいつ出るんだ？異世界へ。」
「明日！！」
「はあっっ！！？？」

あとがき。

もしかしたらハーレムになるかもしれません。ヒロインの想いをこれでもかっというくらい書いといてなんですが。

第2話：転移と猪

綾奈の爆弾発言の翌日。幸い昨日は金曜日だったので今日は学校はない。いや、もう行かないんだけど。疾風(オレ)は綾奈と共に小高い丘の上にいた。ちなみに両親には「旅に出るから。」「分かったわ。」「行ってこい。」という二つ返事でＯＫをもらった。何の心配もしない親共に流石に少し傷ついたが旅に出るのが夢とは以前から親も知っていたのでまあいいだろう。・・・世界を渡る旅となるが。

「では、行くか！異世界へ！」

綾奈はとてもうきうきしているようだ。相当楽しみらしい。

「ところでどんな世界へ行くんだ？」

そう、俺はどこへ行くか全く知らない。魔法がある場所とだけは分かっているが。

「うむ、私にも分からん。」

「・・・」

「クスッ、冗談だ。」

綾奈によると今から行く世界はジュピタスというらしい。ちなみにどうやって行くかというと、綾奈の魔導書が書かれた世界で勇者の召喚魔法を行うとき、指定するジュピタスの位置座標が魔導書にも書かれてあったのでそれを元に転移魔法で移動するらしい。・・・勇者とか召喚魔法とかはスルーしてくれ。後で聞くから。

綾奈はそれから木の枝で地面になんか幾何学模様を書き出した。綾奈がいうには世界を渡るとなると、いまいちイメージが沸かないから補助としての魔法陣、だそうだ。え？分からない？うん、だから俺も。異世界(あっち)行ったらもっと魔法について教えてもらおう。俺にはアレがあるのだが、一般常識としては必要だからな。

「そういえば疾風。君はそれだけしか持って行かないのか？」

ふと、書きながら綾奈が尋ねてくる。俺の現在の持ち物、日本刀一本、いつもの薄黒い和服。マル。
「ダメか？」
「いや、そんな素でダメか？って・・・」
「？綾奈も同じようなもんだろ？」
「まあ、そうなのだが。」
綾奈の持ち物、私服、魔導書。マル。思うと俺等って異世界どころか旅甘く見てるよなぁ。よくこんな持ち物で異世界行こうと思ったもんだ。え？じゃあ行くなよ？いや、何とかなるでしょ多分。
「出来だぞ！！」
どうやら魔法陣を書き終わったようだ。
「おお・・・これはまた・・・」
どっかの某カードゲームかなんかで出てきそうな感じだ。３重の円の中に六角形がいくつも組み合わされている。これが噂の魔法陣って奴か。初めてしっかり見たが何か複雑だな。
「さあ、共に行こうぞ！！」さっきからやけにテンション高いなオイ。
「もう行くのか？」
「うむ。もう父様と母様には別れは告げてある。」
「そうか。」
いつも思うけど綾奈のしゃべり方って何か西洋騎士っぽいよな。西洋騎士知らんけど。
「じゃあ・・・行くか。異世界に。」
「転移！！！」
綾奈がそう呟いたと同時に魔法陣が回りだし、俺たちは光に包まれた。
光が収まると、俺たちの目の前には樹海が広がっていた。どうやら

無事に着いたらしい。
「おおっ！！ここが異世界かっ！！」
そう言う綾奈の目は輝いていて、誰もがその顔から彼女の喜びを察するだろう。そういうとことか何となく子どもっぽいよな、こいつって。西洋騎士なのに。
「どうやらそうみたいだな。しかし、ずいぶん人気のないところに転移したもんだ。そういや綾奈、お前勇者の召喚魔法陣だっけ？それを逆探知したとか言ってなかったか？」
「確かに言ったが、どうかしたのか？」
「いや、つまり勇者が召喚されるとこに転移するんだろ？ここメッチャ樹海じゃん。」
もっと神殿とかみたいなとこじゃなくて？
「いや、私はこの世界のだいたいの位置座標を特定したかっただけだからな。座標は適当だ。」
「あ～・・つまりここはどこかは「分からない」さいですか」
じゃあ俺たち迷子？いやいやいや俺たち異世界人だよ？右も左も分からんし言葉も通じるか分からんし。このまま餓死してＢＡＤ　ＥＮＤとかやだからね？　と軽くパニック状態だが顔には一切出さない俺であった。
ひとまず周りを見て状況を判断。
「見渡す限りの木、木、木、猪、木じゃないか。」
太陽の光は遮られ、木々がうっそうと茂っている。しばしば、鳥？の鳴き声も聞こえる。いや～いいね、趣きあって。そんな現実逃避思をしていると綾奈が一点を見つめながら石化していることに気づく。
「どうした？」
「・・・疾風。お前の言葉の中に聞き流してはならない言葉があったのでな。」
そう言いつつも視線は変えない綾奈。俺はその視線を追ってみることに。

・・・ああ、猪か。せっかく無視しようと決めていたのに。
いや、猪というにはいささか大きすぎるだろうか。俺たちのいるところから目測五十メートルくらい離れたところからこちらへ歩いてくるそれは、二メートル近くある。ぐっとよく目を凝らして見てみると、その風貌が分かる。
灰色の剛毛に包まれた体に、光る紅い目。その白い牙はウェーブ状に曲がって鋭く光っており、突撃されればどんな獲物でも仕留められるだろう。そんな奴がこちらへ向かって歩いてきているのだ。口元のよだれから察するに、食事を求めて彷徨っているのだろうか。
あ、こっち見た。
猪はじっと凝視している。俺はじーっと猪を見る。暫く視線が交錯した後、奴は俺たちを獲物と判断したのだろうか？徐々に速度を上げてこちらに迫ってきた。

にも関わらず、俺たちは平然としていた。徐々に近づく距離。奴の速度は今、時速五十キロ近くにまで達していた。しかも俺たちと奴の間に障害はない。山道となっているのだ。そしてあと十五メートル位になって、もうすぐ襲われるって時にようやく綾奈が口を開く。
「疾風、どうする？」
その目はいつのまにか真剣味を帯びていて、いつのまにか展開されていた大量の魔法陣が空中で回りながら発動を待っている。
じゃあ俺もいきますか。俺は腰の日本刀、夜斬（ヨギリ）に手を掛け綾奈の問いに答える。
「どうするってそりゃぁ・・・仕留めるしかないだろうっ！！」
俺は言葉と同時に踏み込み、居合い切りの容量で夜斬を抜き放ち剣風を巻き起こす。居合い切りとはそれ即ち刀を鞘から抜いた速度をそのまま攻撃に転換させるもの。まして達人レベルなら、その速さは目で追うことさえ不可能だろう。御剣流剣術免許皆伝を持つ俺も例外ではない。俺の場合、本気を出せば音速も超えるかもしれない

が。
剣風はゴウッという音を立てて猪を襲う。途中余波で木々が数十本近く細切れに切り倒されたのは気にしない。かなり限界まで威力を落としたからまだ良い方だ。
そして猪は崩れ落ち・・・
ない。少々切り傷を作った程度だ。それも当然のこと。なにせあくまで狙ってやったことなのだから。
俺の目的は勢いの緩和。おかげで今や奴はもう時速十キロ無い。
全ては、彼女のため。
「綾奈、どうぞ。」
俺は背後に待機していた彼女に最後を譲る。
「うむ。」
綾奈は頷いて片手を突き出す。そこには一つの魔法陣が形成されていた。いや、少し違うか。綾奈の周りにあった魔法陣が重なり合って一つの魔法陣となっていた。魔法陣に膨大な魔力が集まってゆく。
「ゆけっ！！」
綾奈の言葉が引き金となり、魔法陣から極太の純粋な魔力がレーザーとなって射出された。それは奴に向かって一直線に伸びていく。
直後、森が吹き飛びそうなほどの轟音が辺りに響き渡った。

「やりすぎじゃね？」
「・・・」
結果、森に深刻な被害。魔力のレーザーが通った場所は地面が抉れ木は消し飛ばされ。おそらく一キロはこの痕が残っているだろう。
俺の剣風による数十本の木に比べれば明らかにレベルが違う。
「せっかく俺が手加減して獲物として捕らえようと思ったのに・・・

」
そう、俺の目的は食料の確保。日本では猪も食べられていたのだ。きっと奴も食べれるだろうと思い、綾奈にアイコンタクトして手加減して捕らえようとした。
だが綾奈はどう受け取ったのか魔法を遠慮なくぶっ放した。おそらく綾奈は光の魔法を放ったのだろうか。その熱量で猪は現在、黒炭と化している。とても食べれるもんじゃない。
「・・・すまん。」綾奈は相当凹んでるようだ。目を伏せて見るからにシュンとしている。目の端にはうっすら光るものも見えるような・・・あ～・・・言い過ぎたか？
「悪い、言いすぎた。獲物ならどこにでもいるはずだからさ。また見つけようぜ。」
そう言って俺はポンポンッと綾奈の頭を撫でる。そのまま暫く撫でていると次第に綾奈の顔は安らぎ、目じりも下がった。どうやら綾奈(なじみ)はこうすると気持ちいいらしい。だから俺は綾奈の気持ちが沈むたびに撫でている。
「じゃあ改めて食糧確保に行くか。」
「ん・・あ、ああ！」
綾奈は俺の手を名残惜しそうに見ていた（もっとやって欲しいのだろうか？）が、気持ちを切り替えたようだ。
そうして俺たちはまず今日一日を生き残るために行動を起こすのだった。

猪その他の処理をせずに。

ーーーーーーーーー同刻、とある場所の一室にてーーーーーーーーーーーーー
ふっと彼女は魔力反応を感知して、本を読むのを止めた。

「光・・・の魔法でしょうか。」
場所はおそらく西の森。深淵の樹海とも呼ばれている危険な生物が跋扈(ばっこ)している場所。
「ここから西の森までは馬車で一日かかる距離だというのに、すぐそばで魔法が発動しているような存在感です・・・」
それほどまでに魔力が大きかった。
「また誰か有名な魔導師の方が冒険しに行ったのかもしれません」
たまにそういう人があの森を訪れる。生きて還ってきた試しがないが。しかしそれだけならあまり気にならなかった。だが今回は、何故か彼女の胸はざわざわした。そんな時ふと、祖母からよく聞かされた御伽噺を思い出す。
１０００年前、圧倒的魔力と素晴らしい剣技を持ち、かつてこの世界を支配した魔王を倒したという存在。
「勇者様」
彼女は小さく呟いた。もしかしたら今のは・・・と想像して自ら首をぶんぶん振り否定する。所詮は御伽噺。現に魔王なんてこの世界にはいないし勇者についても詳しい記述が無い。誰かが作った作り話かもしれない。
「ですが・・・もし勇者様だったらこの鳥篭から私を出してくれるのでしょうか。」
そんな、当ての無い願いをこぼす。
”コンコン”
物思いに耽(ふけ)っていた彼女を今に戻すドアの音が鳴った。
「姫様、お食事の用意が出来ました。」
それはいつもお世話になっているメイドの声。メイドはこうして定刻になると彼女に食事を告げる。
「分かりました。」
今日も数分の遅れも無く、食事を伝えるメイド。そのことにいつもの変わらない日常を見据えながら何か変化を望む自分に苦笑し、彼女、マリア＝ロス＝クリスティナは座っている椅子からゆっくり腰

を上げるのだった。

――――――――――――――――――

あれから数日が経った。俺たちは野宿をしながらこの森の全体を把握しようとしていた。幸い魔法という便利なものがあるのでほとんど困ることは無かった。寝ることについては結界魔法で外敵から身を守り水を固定化（某ＲＰＧの最初の雑魚敵スラ〇ムのような感じ）してベッドのようにして使った。水の温度は調節できるので暖かいゼリーの上に寝ているような感じで心地よかった。そういえば二人で一緒のベッドを使うことについて綾奈が顔を赤らめていたがどうしたんだろう？

そして水を使った魔法で風呂は浴びれるし洗濯もできる。食事はそこらにある食べれそうな植物を俺が毒味してから食べたり、鳥を仕留めて焼いて食ったりした。

例え魔物が襲ってきても俺たちなら問題ない。

なんだかんだいって、徐々にこの暮らしに慣れつつある俺たちだった。

ハヤテ・レポート（前書き）

ストーリーが進むたびに改稿します。

ハヤテ・レポート

世界観・・・魔法が科学の代わりとなっている世界、ジュピタス。人々は国をつくり、王を決め、時には協力し、時に争いながら暮らしている。

魔法・・・科学の代わりとなっているもの。火・水・雷・風・土の５属性が相互に優劣をつけあい存在する。例外として、無・光・闇がある。２つを組み合わせてオリジナル魔法を作成することも可能。その威力からランクが決められ、ＳＳ（大魔導師レベル）～Ｄ（一般市民レベル）まである。一般市民レベルは調理時や洗濯時に使うものなど、人に害が無いものを指す。空気中の魔力を身体に取り込み、言の葉を紡ぐことで魔法陣を発生させ行う。種類は攻撃系、補助系、治療系など種種様々。鍛えれば言の葉を紡がずイメージのみで魔法を発動させることも可能。一般に学校で詠唱を覚え行使するが自ら詠唱を作り上げる人もいなくは無い。

魔力・・・魔法の媒体となるもの。最初から空気、自然などあらゆるものに宿っているもの。人間は例外として宿らないため空気中などの魔力を吸収して使う。そのため魔法を使えば無くなるが、時間と共に回復する。魔力の許容量は生まれたときに決まる。もし修行などをして魔力の許容量を上げればそれだけ魔力は吸収できる。魔力が切れるとひどい倦怠感に襲われ、最悪気絶する。

魔法学園・・・魔法の知識や詠唱、歴史などを含め生きるために必要なことを学ぶ場所。一般的に１２～１８歳までの生徒が在学している。

魔獣・・・生存する動物の中で体内の魔力が大きすぎて自ら魔法を

使えるようになった生物。身体が魔力に犯されてしまったような危険な種も多いが人間と共存する種もいる。危険な種はその危険度に応じて階級が決まり、全く害の無いレベル１０～大災害レベルのレベル１までである。

ギルド・・・自ら行うのが仕事などを他の人物に依頼するときなどに使う中継所。依頼主は場所、目的、報酬などを名義し依頼書として発行する。それを見た受諾者が依頼を受けるというシステム。また受諾者の強さを明らかにしたり、依頼の危険度などを明確にするためこれもレベル１～１０と階級がつけられている。いろんな依頼をこなすなどしてギルド側から認められると自分の階級が上がる。その逆も然り。ギルドカードというものが発行されそこに自分の階級や個人情報が明記される。また銀行としても利用される。

綾奈の魔導書・・・綾奈が家の倉庫から見つけた書物。Ｄ～ＳＳの魔法が示されている。何故倉庫にあったのかは不明。

夜斬（よぎり）・・・疾風の愛刀。大業物の一つでその切れ味は鉄を斬っても刃こぼれ一つしない。

神具（しんぐ）・・・神が持っているとされる武器。その威力は規定外。

登場人物

御剣疾風（みつるぎはやて）・・・主人公。地球にて御剣流を若くして免許皆伝し、師範代となる。体術も優れ身体能力も高い。とある理由で魔力を持たないがそれをものともしない化け物染みた剣術を持つ。居合いの達人で本気のときの初速は音速を軽く超える。いつも薄黒い着流しを着ていて腰に日本刀、夜斬（よぎり）を差す。顔立ちは整っていて、家系が優れており、己の女性を大切にすべしという心情から陰ながら学校では絶大な人気を誇るが本人は全く気づかない。一部の男子から”女

殺し”と呼ばれ恨まれ妬まれていた（陰ながら）。性格は優しく真面目。綾奈は幼馴染として特に大切に思っている。

玉蔵綾奈（たまくらあやな）・・・ヒロイン。主人公の幼馴染で家の倉庫を漁っていたとき偶々見つけた魔導書で魔法が使えるようになる。どうやら素質があったらしく魔力の許容量は反則級。表ではその少し男勝りな性格と大和撫子のような美貌、優しさ、真っ直ぐさが同性に人気を集め”お姉様”などと言われ慕われている。告白も何度かされたが本人は疾風一筋のため全て断っている。勉強の常にトップをものにする記憶力は凄まじい。それにより、魔導書に書かれていた詠唱と魔法陣は全て覚えた。疾風の甘い言葉（本人自覚無し）にはくらっとくるが他の男に言われてもどこ吹く風。とにかく疾風のことしか眼中に無い。

ハヤテ・レポート（後書き）

お知らせ

突然ですがこの小説の更新を暫く停止したいと思います。

ぶっちゃけて言うと、ストーリーに行き詰りました。まだ5話もいってないのに・・・すみません。ほんとに何にも浮かんでこないのです。自分はこれにむいてないのかと本気で思ったほどです。

いつ再開するかは分かりません。もしかしたらこれをアレンジした別の小説を書くことも考えられます。全く別のになっている可能性もありますが。

少なからずこの稚拙な小説を見て下さっていた方々、ご理解のほどをどうぞよろしくお願いします。

あ　あ

あ

あ

あ　あ

あ

あ

あ　あ

あ　あああ

あああ　ああああああ　あ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9860q/

ワールドトリップ！！

2011年7月17日18時30分発行